

文章理解における一貫性の把握について

石黒 圭

要旨

1文を超えるテキスト的機能についての研究は、日本語では、結束性 (cohesion)、すなわち、指示表現、接続表現のような、形態に表れるものを中心に進んできた。一方で、内容面でのテキスト的機能である一貫性 (coherence) は、なおざりにされてきたきらいがある。本稿では、多数の読み手に「比較的前に出てきたという印象を持たせる表現を含む文」を抽出してもらうという調査をとおして、読み手がどのような表現に一貫性を見いだし、そうした一貫性への意識にもとづいて文章をどのように把握しているかを分析した。その結果、比較的前に出てきた内容を意識するという行為は、文章の全体構造およびその下位構造の把握と密接に結びついており、理解した内容の構造化に役立っていることが明らかになった。

キーワード：一貫性 結束性 文章理解 文章論 テキスト言語学

1 問題の所在

1文を超える連続する文相互の関係についての研究は、日本ではおもに文章論、欧米ではおもにテキスト言語学で扱われるのが一般的である。¹

テキスト言語学では、そうした文相互の関係は結束性 (cohesion) と一貫性 (coherence) に分けられる。²この両者は、ともに文章の構造にかんするもので、文の連続性を保証する概念であるという点で共通している。

しかし、結束性は、文どうしをつなぐ形態的な連続性を重視する³のにたいし、一貫性は、文の内容の連続性を重視するものであるという点で異なっている (de Beaugrande & Dressler 1981:3-7)。つまり、結束性は文法化が進んでおり、指示表現、接続表現のような形態的指標を中心に論じることができるために、研究が比較的進めやすい。一方、一貫性は、そのような明確な形態的指標に依存せず、意味的な関係を探っていく必要があるため、言語学では扱うのが難しい傾向がある。

また、結束性は文章の局所的な構造について言及されるのにたいし、一貫性は文章の局所的な構造だけでなく、全体的な構造と結びつけて言及されることが多い⁴という点でも違いが見られる。もちろん、これは文章全体の結束性の存在を否定するものではないが、こうした傾向が生じるのにはそれなりの理由があると考えられる。

¹ Brown & Yule (1983) など、談話分析 (discourse analysis) で扱われることも多い。

² 文章論では、接続論 (市川 1978) あるいは連文論 (長田 1984) という概念のもとで研究が進められることが多い。

³ その代表的なものとして、Halliday & Hasan (1976) が挙げられる。

⁴ たとえば、van Dijk(1977)。

人間の理解を考えた場合、一般に、読んだ直後は意味も形態も頭に残っているものだが、時間の経過につれて、意味は残るものの、形態は忘れられていく。そのため、文章の全体構造を視野に入れた結束性は生じにくくなり、一貫性のみが意識されるようになる。

しかし、時間の経過につれて形態が忘れ去られ、意味だけ残っている一貫性を、読み手はオンラインでどのように意識し、それを今読んでいる文とどのように結びつけ、文章理解に活用しているのだろうか。

本稿は、形態的指標からはとらえにくい一貫性というものを可視化するために、多数の読み手に「比較的前に出てきた印象を持たせる表現を含む文」を抽出してもらった実験をおこない、そのような文の特徴を文章の全体構造との関連で分析したものである。

2 調査の方法

2010年10月、一橋大学の学部学生316名に以下の課題に取り組んでもらった。⁵

問 文章を前から順に読んでいくなかで、ある表現を見たとき、それまで（直前ではなく比較的前）に出てきたという印象を持たせる文をすべて選び、文番号を書きなさい。⁶

①縁は、まことに異なるものがあり、味なものがある。

②ここでいう縁とは、すまいの縁、すなわち縁側やぬれ縁などのことである。③このような縁があることによって、日本の住宅は、その物理的なせまきにもかかわらず、心理的なせまきをあまり感じないですむ。④座敷から、あかり障子と縁側のガラス障子をとおしてみる庭、それは、室内の落ちつきのなかに、四季の変化をたのしむ、日本のすまいのもっともすぐれた生活空間のひとつの場面だ。⑤また、縁側の障子をあけはなせば、座敷と庭は、縁をはさんでひとつづきのものとなる。⑥夏の午後など、縁側で涼風をうけながら、うたた寝していると、庭の木かげで昼寝をしているのと、おなじような気分になろう。⑦つまり縁側は、もう庭なのである。

⑧縁を異なるもの、というのは、たとえば、軒下のぬれ縁などが、いったい内部空間（戸内）なのか、外部空間（戸外）なのか、判然としない、というところにある。⑨ぬれ縁は、へやからみれば、ガラス障子のそとにある風の吹きさらしのところだから、外部空間とみなされる。⑩しかし、そとからみると、そこは、軒下にあつていちおう屋根や庇^{ひさし}もかかっており、

⁵ 留学生も調査に協力してもらったが、今回の調査結果は日本語母語話者に限っている。なお、この課題自体は石黒（2009:82-85）に掲載されている。

⁶ この調査の性格上やむを得ない部分もあるが、指示が漠然としており、前に出てきたものが表現なのか、話題なのか、内容なのか、調査協力者が判断に迷う部分があったかもしれない。今後は、多くの調査協力者が選んだ文を対象に、別の調査協力者に何を思い浮かべるかを尋ねる質的な調査も必要になるだろう。

また板敷きの床もあるのだから、純然たる戸外空間とはみなしにくい。⑪建築の内部空間でないにしても、せめてその附属空間である、というぐらいのことはいえそうである。⑫あるいは、建築の構成からいうと、屋根があって壁がない庭にある^{あずまや}東屋だとか、壁があって屋根がないヨーロッパの広場だとかいうように、少しずつなにかが欠けた「半建築」の一種といってもいいものだろう。

⑬また、ガラス障子の内側にある縁は、通常、縁側などとよばれるが、そこは座敷のように天井をはらず、軒裏をそのままにみせるのがふつうだ。⑭というのは、日本建築の感覚では、ここは室内空間ではないのである。⑮ガラス障子のなかったむかしは、この縁側には障子をたてず、台風とか大雪のときには、そとから戸板をはめこんでふせぐ以外は、ふだんは吹きさらしのままであったものが多い。⑯いまでもいなかへゆくと、そういう農家を数多くみかけることだろう。

⑰そこで、こういう外部空間でもなければ内部空間でもない、いわばコウモリのような異空間であるぬれ縁や縁側などを、一部の建築家のあいだでは、「つなぎの空間」とか「第三の空間」などというようによんで、純然たる内部空間や外部空間と区別しているのである。

⑱一方、味な空間というのは、はじめにのべたように、室内と庭とを、視覚的・心理的に、ときにはつなぎ、ときにはきりはなす、一種の空間の「連結器」のような役割をもっていることをさすが、それはたんに、視覚や心理にとどまらず、ときには機能的・行動的にも、つなぎの空間としての意味をもっている。

⑲私の家の近所のおばあさんの話を例にひくところだ。⑳おばあさんは、息子夫婦がたてたあかるい洋風のモダン・リビングに住んでいる。㉑ところが、このモダン・リビングには、縁側がない。㉒そこでおばあさんはいふ。㉓昔の家にはみな縁側があったので、としよりは縁側にすわって、針仕事をしたり、孫のお守りをしたり、また庭にではいりしたりして、一日をすごすことができた。㉔さらに縁側にすわっていると、通りがかりの人びとの様子をよくみることができる。㉕近所の人とも挨拶できるし、たまには、縁側に腰かけて話しこんでいってもくれる。㉖雨がふれば障子をしめればよし、お天気になれば障子をあけたまま昼寝をすることもできる。㉗縁側はとしよりにとっては安全で、しかも快適な場所だった。㉘そういう縁側が新しい家からなくなったということは、いくら便利なモダン・リビングでも、としよりにとっては、不便で、味気ないものだ。㉙ではそとへでればよい、といわれるかもしれないが、たとえ近所の公園へゆくにも、女はいちいち着がえをしなければならず、きがるにはであるけない。㉚それにむかしとちがって、通りは自動車がふえてきたためにこわいし、また歩道橋みたいなものを渡らなければならないかとおもうと、気がおもい。㉛息子は、家のなかにいるようにと、テレビを買ってくれたが、テレビとでは話ができない、と。㉜そう語るおばあさんは、さびしそうであった。

㉝ここで私たちは、反省をしてみなくてはならないだろう。㉞としよりにとって、いったい現代文明とはなんであろうか。㉟少なくとも、縁側のないアメリカ式のモダン・リビング

は、日本のとしよりはあまりありがたくないようだ。⑳それは、老人だけではない。㉑主婦にとっても小さい子どもにとっても、たまの休みに家にいる亭主にとっても、庭つづきの縁側は、気持ちよくありがたいものだろう。㉒それがない日本の現代のすまいは、たしかに味気ない生活になりつつある。

{中略}

㉓何百年のあいだ、日本の風土と社会のなかにはぐくまれてきた伝統的な生活空間の数かずを、新しい機械文明のまえに、ただ古くさいからといって、よくかんがえもせず葬りさっしてしまっている例を、私たちの周囲に多くみかけるが、縁もまた、そのようなケースのひとつではないか。㉔仏教では、「縁なき衆生は度し難し」というが、現代の庶民のすまいが、文字どおり縁なき衆生になるのでは、こまったことである。

(上田篤「縁」『日本人とすまい』岩波新書より)

「問」のなかで「それまで（直前ではなく比較的前）に出てきたという印象を持たせる文をすべて選び」と指示することで、結束性を示す指示表現のような文ではなく、意味的な一貫性を持つ文を選択させるように誘導した。「比較的前」という指示の解釈によっては結束性を考えた学生もいるだろうが、結果から見ると、おおむね一貫性が感じられた文を抽出しているように思われた。

「比較的前」という指示によって一貫性が測れると考えたのは、読み手の文章理解のプロセスを考慮したからである。

第一言語話者が文章理解をオンラインでおこなう場合、今読んでいる文に指示表現があって、指示先が直前の文に含まれる場合、作動記憶のなかだけで照応作業は完結すると考えられる。第一言語話者が処理する単位（chunk）は語ではなく、句や節といった比較的大きな単位であるため、直前の文であれば、作動記憶のなかに十分に保持できると考えられるからである。

しかし、数文前に出てきた内容を照応する場合、指示先は作動記憶から長期記憶に意味記憶として移っている可能性が高く、指示表現だけで指すことは難しい。さらにそれが数段落前になると、指示表現だけで指すことはもはや不可能である。それでも、今読んでいる文を見たとき、前の内容を指していると感じられるということは、そこには結束性とは異なるメカニズムが働いており、そこにこそ読み手が長い文章をオンラインで構造化できるカギが隠されていると考えられる。

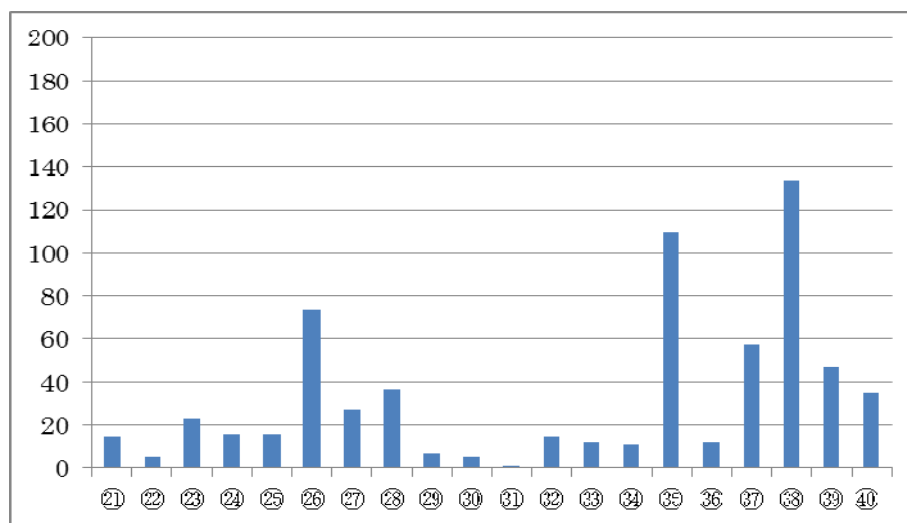
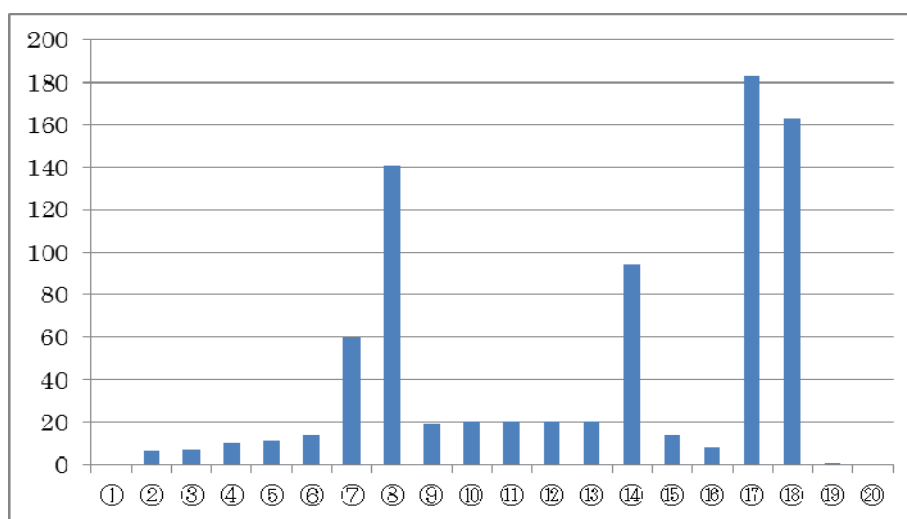
3 調査の結果

調査の結果は、次の表、およびグラフのとおりである。316名の指摘した数の合計は1,471箇所、平均すると、4.66箇所であった。

表 呼応判定の調査結果

番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
人数	0	6	7	10	11	14	60	141	19	20	20	20	20
⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗
94	14	8	183	163	1	0	15	5	23	16	16	74	27
㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲	㊳	㊴	㊵	計
37	7	5	1	15	12	11	110	12	58	134	47	35	1471

グラフ 呼応判定の調査結果



このグラフを見て、山の高い文番号を抽出しておく。50名以上という基準に考えると、前から順に、⑦、⑧、⑭、⑰、⑱、⑳、㉓、㉖、㉗、㉘の9文になる。それにくわえるなら、㉙と㉚にもやや高い山が感じられる。こうした、比較的前に出てきた文を意識させる表現を含む文を、「振り返り文」と呼び、次節以降で詳しく考察する。

4 振り返り文と文章の全体構造

先ほど多数の読み手に選ばれた振り返り文9文を、もともとの文章の構造との関係で考えてみたい。

冒頭の①と、末尾の「中略」以降の㉙と㉚を除くと、この文章は三部構成になっていると考えられる。

冒頭の①「縁は、まことに異なるものがあり、味なものがある。」を読んだとき、この文章はいったい何を言おうとしているのか、読み手は戸惑うと思われる。「縁」というのは人間関係の縁のことだろうか。⁷だとすると、縁が「異なるもの」「味なもの」というのはいったいどういうことなのだろうか。そうした三つの問いを抱えて読み手は読みはじめることになる。

最初の問い「縁とは何か」にたいする答えは、第二段落で示される。その冒頭の文②「ここでいう縁とは、すまいの縁、すなわち縁側やぬれ縁などのことである。」で縁の定義が提示され、その後も縁の説明が続き、⑦で閉じられる。

第二の問い「縁が異なるものとはどういうことか」は「縁を異なるもの、というの」で始まる第三～第五段落で示される。文番号でいうと、⑧～⑰に相当する。

一方、第三の問い「縁が味なものとはどういうことか」は「一方、味な空間というの」で始まる第六～第八段落で示される。文番号でいうと、⑱～㉘に相当する。そして、「中略」のあとの第九段落がまとめになる。

こうした文章の構造と、読み手が比較的前に出てきたと感じる振り返り文9文を比較すると、高い相関関係があることが見てとれる。

第一の問いを開始する文②と終了する文⑦、第二の問いを開始する文⑧と終了する文⑰、第三の問いを開始する⑱と終了する文㉘、この6文のうち5文までがさきほどの9文に入っていることがわかる。⁸

しかも、多くの読み手が指摘した上位4位までの文⑧、⑰、⑱、㉘がいずれもそこに含まれていることに注目したい。つまり、比較的前に出てきた文を振り返るということは、文章の全体構造を意識することと結びついているのである。

⁷ 「縁＝人間関係」と解釈する考え方は、直後の文を読むと誤読に思えるが、「縁側の縁」が「人の縁」につながることで最後の㉚で示されて、この文章は閉じられることから、実際には誤読ではないことがわかる仕掛けになっている。

⁸ ちなみに、9文に入っていなかったのは②である。「比較的前」と指示されている以上、冒頭の文の直後にある②が指摘できないのは、いわば必然である。

その理由について考えてみると、問いの開始に当たる⑧や⑬の数值が高いのは、言うまでもなく、「縁を異なるもの、というのは」「一方、味な空間というのは」という書き出しの影響である。冒頭の①「縁は、まことに異なるものがあり、味なものがある。」を受け、縁の性格を文章全体で2分割して説明していることがわかるからである。

一方、問いの終了に当たる⑰や⑳の数值が高いのは、それぞれの問いの開始の文と、それ以降の説明の文を内包し、まとめているからだろう。

⑰は「そこで、こういう外部空間でもなければ内部空間でもない、いわばコウモリのような異空間であるぬれ縁や縁側などを、一部の建築家のあいだでは、『つなぎの空間』とか『第三の空間』などというようによんで、純然たる内部空間や外部空間と区別しているのである。」という文であった。この⑰の「異空間」には①の「まことに異なるものがあり」の影響が、同じく⑰の「外部空間でもなければ内部空間でもない」には⑧の「軒下のぬれ縁などが、いったい内部空間（戸内）なのか、外部空間（戸外）なのか、判然としない」の影響が見てとれる。

同様に、㉑の「それがない日本の現代のすまいは、たしかに味気ない生活になりつつある。」のなかの「味気ない」には①「味なものがある」の影響が、同じく㉑の「それ（＝つなぎの空間）がない」には⑬の「つなぎの空間としての意味をもっている」の影響が感じられるのである。

5 振り返り文と文章の下位構造

前節で見た5文以外に選択者が多かった振り返り文、⑭、⑲、㉒、㉓の4文についても見ておきたい。

⑭の「というのは、日本建築の感覚では、ここは室内空間ではないのである。」は、第二の問い「縁が異なるものとはどういうことか」に出てくる二つの例「ぬれ縁」「縁側」のうち、後者の「縁側」に対応している。

この⑭の「ここは室内空間ではないのである」は⑩の「純然たる戸外空間とはみなしにくい」と対になっている。そう考えると、一見戸外だが、そうとは言いきれない⑧の段落の「ぬれ縁」、一見室内だが、そうとは言いきれない⑬の段落の「縁側」という大きな対比も見えてくる構造になっている。つまり、この文をとおして、第二の問い内部の構造が読み手に意識させられるのである。

具体例の列挙の最後に位置する㉒の「雨がふれば障子をしめればよし、お天気になれば障子をあげたまま昼寝をすることもできる。」を選んだ読み手は、おそらく第二段落の縁の定義の部分の後半、四季を感じたり、昼寝をしたりしている部分との対応を意識したのだろう。

㉓の「少なくとも、縁側のないアメリカ式のモダン・リビングは、日本のとしよりにはあまりありがたくないようだ。」は、三つの問いのなかでもっとも長い「味な空間」におい

て、挿入されているおばあさんの例のまとめに当たる文である。その開始部である⑳の「おばあさんは、息子夫婦がたてたあかるい洋風のモダン・リビングに住んでいる。」と対になる文であり、第三の問い内部の構造を作りだしている。

㉑の「主婦にとっても小さい子どもにとっても、たまの休みに家にいる亭主にとっても、庭つづきの縁側は、気持ちよくありがたいものだろう。」は、直後の㉒とともに第三の問いの終了部を構成している。部分的には、今見た㉓とペアになっており、㉑の「縁側はとしよりにとっては安全で、しかも快適な場所だった。」とも対応している。つまり、年寄りも、主婦・子ども・亭主も、となっており、やはり、第三の問い内部の構造と関連している。

やや高い山が感じられた㉔と㉕にも言及しておきたい。この部分は文章全体のまとめに当たる文であり、一見するとそれまでの内容と直接の対応関係は見だしにくい印象がある。しかし、内容を読みこむと、それまでの内容との対応関係が次第に見えてくるようになっていく。

㉖の「何百年のあいだ、日本の風土と社会のなかにはぐくまれてきた伝統的な生活空間の数かずを、新しい機械文明のまえに、ただ古くさいからといって、よくかんがえもせず、に葬りさってしまっている例を、私たちの周囲に多くみかけるが、縁もまた、そのようなケースのひとつではないか。」は㉗から始まる段落の解釈になっている。そのことは、㉘に出てくる「機械文明」と㉙に出てきた「現代文明」の対応関係を手がかりにすればわかる。

また、㉚は「仏教では、『縁なき衆生は度し難し』というのが、現代の庶民のすまいが、文字どおり縁なき衆生になるのでは、こまったことである。」は、「縁」に「縁側」の「縁」と人間関係の「縁」をかけたものである。

この文㉚と直接対応する表現は見だしにくいだが、㉛の「一方、味な空間というのは、はじめにのべたように、室内と庭とを、視覚的・心理的に、ときにはつなぎ、ときにはきりはなす、一種の空間の『連結器』のような役割をもっていることをさすが、それはたんに、視覚や心理にとどまらず、ときには機能的・行動的にも、つなぎの空間としての意味をもっている。」という文を思いだすと、この文㉚の、文章全体における意味が見えてくる。

室内と庭とをつなぐ「異な」空間連結器である「縁」は、家の中と外の人間関係をつなぐ「味な」空間連結器でもあるのである。つまり、空間としての「縁」がないと、人間関係の「縁」も失うことにつながる。それが、この文章をとおして筆者が言いたかったことであろう。ここには、形態に頼らない高度な一貫性が見られるのである。

6 まとめ

以上の考察をとおしてわかったことは、ある表現をきっかけに比較的前の内容を意識するという読み手の理解のあり方は、文章の全体構造およびその下位構造を把握することにつながるということである。

改行がなければ一本の線でしかない文章が、読み手によるオンラインの理解のなかで構

造を持って把握されることは、思えば不思議なことである。こうしたことを可能にする背景には、指示表現や接続表現といった、結束性を保証する形態的指標があることは疑いないが、それだけで長い文章の構造化について説明しつくすことは困難である。

そうした読み手の文章理解の複雑なメカニズムを明らかにするためには、結束性だけでなく、一貫性も視野に入れて考えなければならない。

もちろん、これまでの文章研究にも、そうした全体構造の把握しようとする試みは、数こそ少ないが、確実に存在した。たとえば、永野（1986）の接続論・連鎖論・統括論の3本柱による文章論、佐久間（1992）の「段」の研究、長田（1995）の「自問自答」の研究などがそれに該当し、それぞれ有力なモデルとしてその後の研究に影響を及ぼしている。

本稿は、オンラインで読み手がおこなっている振り返りという行為に注目し、そうした研究とは違った角度から、文章の全体構造の解明に貢献しようとするものである。

文を超える関係についての研究は、指示表現や接続表現など、そうした役割をもつばら担うものにどうしても目が行きがちであるが、そうではない内容ベースの研究が今後はさらに必要であると思われる。本稿が、そうした研究への呼び水になることを願っている。

参考文献

- 石黒圭（2009）『よくわかる文章表現の技術Ⅱ 文章構成編 [新版]』明治書院
- 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 佐久間まゆみ（1992）「文章と文 一段の文脈の統括一」『日本語学』11-4
- 長田久男（1984）『国語連文論』和泉書院
- 長田久男（1995）『国語文章論』和泉書院
- 永野賢（1986）『文章論総説』朝倉書店
- Brown, G. and Yule, G. (1983). *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- de Beaugrande, R. de, & Dressler, W. (1981). *Introduction to Text Linguistics*. London: Longman.
- Halliday, M.A.K. & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.
- van Dijk, T. A. (1977). *Text and Context: Explorations in the semantics and pragmatics of discourse*. London: Longman.

(いしぐろ けい 国際教育センター准教授)